

Sample

永遠戦争

-II-

—君を忘れた世界で—

Much Respect to "the Spirit of Eternity Swords" and "Code Geass:Lelouch of the Rebellion"

Especially for Naofumi TAKASE as a producer of its great works.

And for Goro TANIGUCHI as a director of its graceful series.

【主な登場人物】



ファイムナルスレスティアーナ
本作における攻め。「する方」
魔術師協会の最高権力者。『黒の教皇』。
上京してきたティアリイを男の子と勘違いし、
一目惚れする。
一人で勝手に盛り上がることもある。



ティアリイアフェルルゲインズブルーク
本作における受け。「される方」
一介の田舎の魔術師だったが、『万世一系の
魔術を識る』として、協会の幹部に抜擢される。
感情表現や、自分を表現することが苦手。
ファイムに三回告白され、漸く受け入れた。



エリシイルフエアセリスティス
北方に座す「ノヴァアラゼムリア」を本山と
するイズミエル正教会教主。『白の教皇』
宝石を嵌め込んだようなオッドアイに、白皙の
美貌を持つ。
彼女の意志は神託とされ、神の化身として
祀られている。

アイギアスフエアノルニル

神話の創世の女神を名乗る、少年のような少女。
この世界の歪みを正すと謳い、ファイムに教会を倒すよう唆す。
ファイムはそれを由としなかったが、協会に籍を置くことは認めら
れ、表向きはファイムの内弟子として生活している。

ファルデアイエーナツイイス

大陸有数の企業「ツイイスステイフタン財団」令嬢。ファイムの
幼なじみ。いつもよれよれの白衣に麻のシャツ、それにテント地で作
られたパンツを着ている。

天才と謳われ、魔術の根源とされる『魔力素子』の研究の第一人者
である。
尊大で、ぶっきらぼうだが、根はお節介である。

フィロメラステラシオ

ティアリイ付きのメイド。医学を学んでいたが、経済的な事情によ
り、侍女の道を選んだ。母性的で、献身的な女性である。

イルンツイクインディーナ

エリシイルの身の回りの世話をする下女のひとり。
エリシイルを「姉様」と呼んで慕っている。

エリシイルもそれを悪く思っていないようだが、一部の信徒の不興を
買っている。

RELIDIA DOSTRAVI IZMYELE



【前巻のあらすじ】

「禁呪の索引引き」の異名を取る、若干一八歳の魔術師、ティアリイは魔術師の同業者組合である、「魔術師協会」の幹部として抜擢され、その本部が置かれるインスブルクへとやってきた。

そこで、ファイムという少女に見初められる。

彼女は、魔術師協会の長。

ある日、ファイムはティアリイに思いを告げた。

しかし、ティアリイは、その思いを心に留めた。

そんな二人を差し置いて、歴史の歯車は廻る。

思いを告げ帰り道、ティアリイとファイムは、相対する敵、「イズミイエル教会」の魔手に落ちた。

咄嗟の機転で、ティアリイはファイムを、自らの命と引き替えに存生させた。

想い人を失ったファイムは悲嘆に暮れ、

愛する人を奪った教会へ、復讐を誓った。

斯くして、神の見守る戦争が、幕を開ける――。



Reminiscence to Wake My Destiney.

First Time, I Broke The Promisses.

Knowing that Our Mission will take us to the

New Worlds,

Go F.uther and Beyoud our World.

第二幕 「Turii」

I

——一四七四年 赤龍の月 五つ

——イスファーン王国 王都 ノヴァルティス

ファルディアは少なからず不機嫌だった。南方独特の高温の気候に、未舗装の道路が目立つ歩道、それに治安の悪さ。何をとつてもはるか北のインスブルクには敵わない。しかし、学者たるもの、学会だ講演だと呼ばれば行かざるを得ない。ファルディアは、魔術師協会の研究者であると同時に大陸に名を轟かす天才でもある。在野の研究者の身分とはいえ、その見識と実績を広めて回り、学問の格差を縮めるのも先進を突つ走る研究者の役割でもある。

「だからつて………なあ」

誰ともなしに呟いたその言葉は、ため息と共に消えてしまう。いや、それを砂の絡んだ、いがらつぽい喉を咳払いで誤魔化して、黄砂に霞む街並みをぼうつと見つめる。

イスファーン王国は、インスブルクから鉄道で二日かかる、南の港湾都市と大陸中央の山岳都市に挟まれた、砂漠の真ん中に居を構える貿易の交差点として栄えてきた中継都市である。多くの文化が交叉し、混和される都市。それがイスファーンであり、王都ノヴァルティスである。

ノヴァルティスは、インスブルクのように一定の階級が集中しているのではなく、全ての階級が、住むところを変えて、ごっちゃになつてそこに集中している、人種と富が混ざり合う坩堝の都市だ。

砂漠の都市が発達するのに必要な要素はひとつ。それは「水」の有無だ。水があるが故に人が集まり、そこに交流が生まれ、商売が生まれ、流通が発生する。そうして、人の流れが出来、やがて街となり、集落となり国になる。それが、イスファーン王国である。

砂漠独特の気候。雨は殆ど降らず、空気は乾燥している。そのため、日中の体感温度はそれほどでもないが、夜間は気を抜くと風邪を引きそうなくらい冷える。

ファルディアは、イスファーン王国の王立大学主催の学会に参加していた。本来なら行かないか、無視したのだが、運悪く会長招演に当たつてしまい、無下にできなかったのだ。

(まったく……私みたいな天才がどうしてこんな凡才の………)

「——ですから、——は、——で、——なので、当大学の観測における——」

ふと、耳に入る文。

思考が音を立てて回る。こんな感覚は久しぶりだ。

奈落に落ちるような感覚。自分の周りが暗幕に覆われたようになり、自分だけがそこに存在しているかのような錯覚を起こす。まわりの声も、雑音も、なにも耳には入らない。すべての感覚は遮断され、思考だけが明晰に研ぎ澄まされる。

「ファルディア先生。講演の時間です」

「え。ああ。わかった。五分だけ待ってくれ。すぐ戻る」

後ろで、何か声があったが、気にも留めなかった。

いつの間にか早足になっている。それがいつのまにか駆け足にある。

ファルディアの足は出口に向かっていた。

息を切らせて、会場を出る。夜の砂漠は冷える、砂埃を吸い込んで、思い切り咳をした。

不思議とそれは気にならなかった。舗装されていない土の道を一目散に走る。あばら屋が建ち並ぶ街を走り抜け、漆喰作りの建物の合間を擦り抜ける。

そうして、ファルディアは宿にたどり着いた。

息はとつくに上がっていた。脇腹がずきずきと痛む。けれど、そんなことを気にしてはいられない。ファームに、このことを一刻も早く知らせなければならぬ。

階段を駆け上がり、廊下を走り、扉を蹴飛ばすように開ける。

部屋に乱雑に散らかっている衣類、書類、書籍の類を丸めるようにしてスーツケースに詰め、ファルディアは夜逃げをするかのように宿を後にした。

「すまない。釣りはいい。急いでるんだ。こいつでいいか」

ファルディアはフロントで協会印の入った小切手を一枚置くと、主人の答えも聞かずに駆けだした。

鞆は重い。けれど、鉄道の駅までは近い。

「あー、その少年。これでいいかい？」

ファルディアはそう言うと、銀色の硬貨を投げて駅の近くに居た少年に声を掛ける。身なりが薄汚いが、こういう連中は少し弾めば余程のことが無い限り信用できる。今渡した硬貨一枚あれば、二日間は食に困らない、そういう額だ。

少年が破顔する。その体格にはやや不釣り合いな鞆を預けると、少年は難なくそれを運ぶ。

「鉄道事務所まで案内してくれ」

そう言つて、ファルディアは、また銅貨をちらり、と見せる。少年が頷く。満足そうな笑みを浮かべて。

少年の先導で、ファルディアは駅の窓口にたどり着く。

「何か御用ですか？」

南方訛りのきつい標準語で、駅員がぶつきらぼうに言った。

「インスブルク行きの手配して欲しい」

「二日先までいっぱいですよ」

にべもなく、駅員が言う。

けれど、ファルディアは引き下がらなかった。

「いいか凡才。私はインスブルクに着けばいいと言ったんだ。誰も直行便を手配しろなんて言っていない。定期便は昼にしか出ないことなんか知っている。夜行があるだろう」

「ありますよ。イスマイリア行き。九時発」

イスマイリアはイスファーン王国の隣国、シャハル国の商業都市である。

「よし、じゃあイスマイリアからヴォブラストを経由して最短でフェルトクライツに入るルートを手配してくれ」

ファルディアが指定しているのは、ひたすら大陸を北上していくルートで、定期便が乗るのと同じルートである。つまり、ファルディアは各駅停車を乗り継いでフェルトクライツまで還るつもりなのだ。

「……お客さん。正気かい？ あんた二日間寝ずにフェルトクライツまで行く気か？」

それに苛ついたようにファルディアは言う。

「徹夜は職業柄慣れる。できるのだからできないのかはつきりしろ、愚

図は嫌いなんだ」

それにカチンときたのか、顔を強ばらせた駅員が備え付けの機械になにごとか打ち込み始める。

それを眺めていると、ファルディアの袖が引つ張られる。

何事か、とその方を振り向くと、少年が右手を差し出していた。

「……つたく……」

ファルディアはポケットを探ると、小銭を三枚、渡す。

「お客さん！」

「へいへい。なんだい」

「代金。それと一応、旅行手形」

協会の権力の及ぶ範囲では、国境をまたいだ移動を行う場合、旅行手形と呼ばれる証書が必要になる。同盟内で共通で、国境でそれを車掌や管理官が確認し、入境を認めることになる。戸籍の存在しない国外で、自分が他国に住む者であることを証明するのが、この証書である。

滅多にないが教会の領域、即ち大陸南部から北部へ旅行する際には、ラウプホルツ自治区によって発行された「隧道往來許可証」及び教会印の押された「旅客証」、そして魔術師協会の「旅行手形」の三部が必要になる。

へいへい、といい加減な返事をしながら、ファルディアは旅行手形と紙幣を出す。

「それじゃあ、五番ホームだ。良い旅を」

それは駅に勤める者の定型句。客を送り出すための言葉。

ファルディアは、差し出された切符を受け取り、少年を連れだつて歩き出す。

「おねえさん。そんなに急いでどこに行くの？」

少年が、不思議そうに言った。

「ん。そうだな、少年。魔術師協会は知っているかい？」

その問いに、少年は首を振った。

「ぼくは、『少年』なんて名前じゃないよ」

「そうか、そいつあ、済まなかった。じゃあ、お姉さんに君の名前を覚えてくれないかい？」

破顔して、ファルディアが言うと、少年ははにかんだように言った。

「シーア。シーアIIタフタル」

「じゃあ、シーア。お姉さんはこれから大事なことを偉い人に知らせなきゃいけない。だから、急いでるんだ」

「ふうん。お姉さんは、何してるの？」

その問いに、ファルディアは躊躇した。

後ろめたいことは何もない。けれど、よくわからないが、彼にそのことを告げるのが躊躇われた。

「………学者。だよ」

「わあ！」

無邪気そうに、少年は言った。

「じゃあさ、お願いがあるんだ」

「………なんだい？」

「ぼくに、自分の名前の書き方を教えてくれない？」

ああ、そうか。

この子は、自分の名前すら書けないし、読めないのだろうか。

別に、何も珍しいことではない。教育制度が発達していないか、貧富の差が激しい国ではよくあることだ。

「ああ、いいよ。標準語でいいかい？」

「うん！」

なんとなく上の空で、ファルディアは応じた。

「Schia。これが君の名前だ」

手帳を取り出すと、ファルディアはそれに万年筆で綴つて見せた。

「Tahatar。これが君の家の名前」

少年は、それを目を輝かせて見ていた。

その手帳のページを破ると、ファルディアは少年に押しつけた。

「ほら、あげるよ。自分の名前くらい書いて損はないさ」

「ありがとう、おねえさん！ あ、そうだ」

少年は、ポケットをこそこそやると、ファルディアが出した小銭を差し出した。

「これ、お礼だよ！」

それに、ファルディアは言った。

「君は、困らないのかい？」

「ううん。でも、お父ちゃんが言つてた。世の中は釣り合つてるんだつて。何かを貰つたら、何かを返さなくちゃいけないつて。お姉さんは、ぼくに荷物を運ばせるかわりにお金をくれた。でも、ぼくに名前の書き方を教えてくれた。だから、その釣り合いをとらないといけないんだ」

「そうかい。じゃあ、きみのお父さんに免じて、これだけ貰おう」

そう言つて、ファルディアは、その中から一番額面の小さい銅貨を取つた。

「えつ……いいの？」

「ああ。いいんだ。私にとつてこれはこのくらいの価値しかない。少年。いいか、知識つてのは目に見えない財産だ。今の私にとつて、コイツはこのくらいの価値しかない。だが、君にとつては三日分の稼ぎと同じ価

値がある。少年。今は辛いかも知れないが、諦めるな。腕つぶしも強くない、金持ちの家に生まれたわけでもない。連中と同じようになりたいなら、君は目に見えない財産を手に入れるしかない。君は小銭をもらえば一日生活できるかも知れないが、いま私が教えたことは一生の財産になる」

少年は、それに無言で頷いた。

「説教くさくてごめん。だが、君みたいなのは放つておけない質でね」

「別にいいよ。五番線、だよね」

少年は、照れくさそうに言つた。

「ああ」

ファルディアはそう言うと、少年に従つてプラットホームへ向かう。

そして、二日二晩をかけた、ファルディアの旅が始まつた。

2

「フェアはいるかい？」

ひよい、とドアから顔だけのぞかせて、ファルディアが言つた。

見るからに疲労困憊^{ひろうこんぱい}、といった様で、目の下には大きな隈^{くま}ができている。普段から化粧気のない顔は見るからにやつれ、吹き出物^{吹き出物}が出来るはじめた痕さえ見える。

「外しているわ。どうしたの？ こんな夜中に。ファル。あなた学会じゃなかったの？」

訝^{あや}しそうな顔をするフェイスに、ファルディアは応じることなく扉を開け、革製のスーツケースと自分の身体を扉の中に押し込めると、後ろ手で、執務室の扉に鍵を掛けた。

「……………」

「落ち着いて聞いて欲しい。レティ。君に一番に報告しなければなら
ないことだ。友達としてじゃない、君に仕える僕として、だ」

いつになく深刻そうな顔で、彼女はそう言った。

「……………な、何よ」

『ヴェルキアルト仮説』という学説を知っているかい」

「いいえ」

ファイムの返答は素っ気ないものだった。無理もない、とファルディ
アは心中で嘆息して口を開く。

「この世の魔力素子が有限かもしれない、という仮説だよ。レティ。
魔術を使うたびに魔力の元は目減りしていく、そうして、いつかはなく
なる。魔術が有限資源に基づいている、という仮説だ」

その言葉を聞いても、ファイムは表情一つ変えなかつた。基礎研究者
にしてみれば、世界がひっくり返るような話だ。今まで無限にあると思っ
ていたモノが、有限であるということなのだから。

「驚かないのかい？」

「……………ええ。まるで『空気が有限だ』と言っているようにしか聞
こえないわ。はっきり言つて荒唐無稽よ。ファル、あなた悪いものでも
食べたんじゃない？ お酒が入つてるとか？」

「いいや」

ファルディアの口をついて出たのは否定の言葉。

「空気は有限さ。植物は我々が放出する生気を還元して空気にしてい
るんだから、その釣り合いがとれている限りは無限に見える。だが、魔
力素子は違うんだ。

とにかく——これは、証明した者勝ちだ。気づいた者が、本気にし

た為政者が、一番先に確信に至り、行動した者が勝つ競争なんだ。わか
るかい、レティ。水と一緒にだ。古くの戦争は、水の奪い合いだった。次
は塩だ。塩の奪い合いだ。だが、そいつは所詮、領地と財の奪い合いだ。
今度は違う。今度は——空間の奪い合いだ」

「——空間？」

「そう。空間。魔力素子が存在するありとあらゆる空間が国力の証明
になる。それが荒地であれ、上空に大量の魔力素子が存在していれば、
そこは資源になる。財が国力を示した時代が終わってしまう。魔力素子
という資源を、保持している国家が大国になる時代が来るんだよ」

「わけがわからないわ。ファル。落ち着いて。あなた言っていること
が無茶苦茶……………」

「無茶苦茶かもしれないが、大事件なんだ！ これは！ 政治の意味
が変わるんだよ。レティ。君が今座っている椅子も、私たちを照らして
いる灯りだつてそうだ。すべては魔力素子なくして存在し得ない。すべ
ての技術の根幹だ。

それが、なくなるんだ。文明が砂上の楼閣だつたということさ。底の
支え棒を外せば、いとも簡単に我々の文明は崩れ去る。だから——
動機はどうあれ、君の意見は正しかったんだ。教会がこれを証明する
前に、先手を打たなければ、世界を巻き込んだ資源の奪い合いが始ま
る——！ 魔術師協会だつて、一枚岩でなくなるかも知れない。

保身に走る者達が、どういう行動をするか、君はよく知っているだろう？
つまり、教会がこいつに気づく前に、教会を潰さなければいけないん
だよ。

そうして、その事実を隠蔽するんだ。我々が代替技術を補完するまで。
その技術が完成するまで——この体制から抜け駆けする者を出さな

いようにするんだ。そうならなければ、待つている未来は小国乱立の戦乱の世だ」

一気にまくし立てるファルディア。その鬼気迫る様子に当てられたのか、ファイムがゆっくりと口を開く。

「……………詳しく、話して。私に分かるように、丁寧に。ゆっくりと、ね」

「ああ。『ヴェルキアルト仮説』というのは、最近できた『クリスウェリア予想』という学説に基づいている。詳しいことは省くが、単純に言うとうと、魔力素子は一カ所に留まっていない、という可能性を示した仮説なんだ。証明はされていないが、殆ど正しいと言われている」

我々の世界では、『九九パーセント正しい』、というのを百パーセントに近づけなければならぬんだ』と加えて、ファルディアは続ける。

「流動して循環系を回るのならそれでいい。だが、あいつは大量の魔力素子を標識して、その流れを追ったんだ。その結果が……ヴェルキアルト仮説。こいつは標識されて拡散した魔力素子を大陸南部の協会同盟国内で観測して、その分布の統計に基づいている」

「……………結果は、どうなったの？」

「標識した魔力素子は十分な時間を経れば、協会同盟国内で観測される量が半分にならないといけない。これは、空間内を魔力素子は自由に振る舞うというクリスウェリア予想に基づいている。ところが、協会同盟国内で観測された魔力素子の量は、統計学的に有意に減少した。にも関わらず、定常観測で得られる値は同一。これで得られる予測は二つ。一つは、素子が偏在している可能性。もう一つは、素子が均等に減少している可能性。多くの学者は、前者の説を採っている。理由はいろいろ考えられてきたが、今ひとつ決定打に欠けてたんだ」

ふん、とファルディアが鼻を鳴らした。

「で、会長招演をすっぱかして戻ってくるくらいだから、さぞかし大発見なんでしょうね」

それに、ファルディアは、深刻そうに頷いた。

「ああ。そうだ。悪いニュースだ」

流石は私の弟子、と言いたい……………。残念だな、一歩足りなかった。彼女の発表を聞いてね、私は、気づいたんだ。魔力素子は、ぶつけると、消えるんだ」

「……………えっ……………??」

絶句、した。

「いや、普通にぶつけると消えるのはほんの数万分の一だ。そのときに魔力素子はそれを代償にして、空間に圧倒的な干渉を行う。それが、魔術だ」

「……………それ、ほんと……………なの……………?」

初耳だった。ファイムは、いいや、世界中の誰もが、魔術とは、生まれながらにして持つ人間の才であり、力であると思っている。それは、永遠に、人間の文化の根底を支え、発展を約束する英知であると、思っていた。

「ああ。教科書が書き換わる大発見だな。魔力素子がぶつかって消えると、そいつを補うために魔力素子が教会側から流入する。そうすると、大陸の山岳地帯は魔力素子の吹きだまりが出来たりする。まあそいつは偉い地質学者かなんかが調べてくれているだろう。そんなことはどうでもいいんだが、要するに、魔力素子を大量に消費している我々の所に、そいつらは、必然的に流れ込んでくる。釣り合いを取ろうとするんだ。単純だが、これでおおまかのことは説明が付く。クリスウェリア予想も、ヴェルキアルト仮説も、だいたい正しいことになる」

「わからないわ。ファル。我々の消費を補おうとして、魔力素子が流れ込んでくるのなら、均等になるんじゃないの？」

「緩衝、というんだが……。魔力素子がぶつかって消えると、二つの魔力素子が流入する。これはいいね？」

「ええ」

「だが、魔力素子は複数の種類があることが示唆されている。あくまで『示唆』だが、そいつを検討した場合、流入した魔力素子は、消えた魔力素子と同一でない可能性がある。そうすると、そこでまた釣り合いがとれなくなる。その釣り合いを取るために、また素子が動く。こいつを『緩衝』という。一番安定した状態を取ろうとして、素子が勝手に動くんだ。別に素子が意志を持つてるわけじゃない。素子同士が干渉し合った結果、起こる機械的な現象なんだ。

さて、一定のペースで魔力素子を使っていれば、そいつらは決まったリズムで動き続ける。だが、経済的に停滞している北とは違って、経済発展を遂げている南の魔力素子の消費量はどうかだろう？」

「ふえて……いる？」

「正解だ。しかも、仮に複数の種類の素子が存在すれば、その消費バランスも一定ではないと仮定できる。つまり、素子の偏在が起こる。素子の偏在が起これば、ますます流入は激しくなる。我々が計測しているのが、もし、もう既に枯渇し始めている素子だったらどうなる？」

「……………魔術が……………おわる……………」

「そうだ」

ファルディアは、首肯した。

「……………それに、気づいた者はどのくらいいると思うの？」

「わからない。優秀な学者なら想像するくらいはするかも知れないが、

証明まではしないだろう。荒唐無稽な学説ができあがるだけだ。なんせ、仮定の上に仮定を積み上げているわけだからな。

ただ……………あいつが……………」

「あいつ？」

ファームは、ファルディアが昔を思い出すような顔をしたのが気になった。

けれど、ファルディアは、なんでもないうように答えた。

「まあ、いいさ。おいそれと学会に来るようなタマじゃない。私はそいつを証明する仕事に戻るとするよ」

「……………会長招演、すっぱかした理由はどうするの？ 謝るのは私なのよ」

「あ……………水あたり、つてことにしといてくれないか。な！ 一生に一度の天才の過ちと言うことで……………」

「通らないわよ。あとで始末書、一筆書いて、私の所に持ってきたさい」
はは、とファルディアは頭を掻くと、言う。

「なあ、レティ」

「何？」

「君は……………もし、魔術が有限だったら、どうするかい？」

「……………未来を背負うのは、貴女たち学者。我々は今を最善にするべく働く公僕。私に出来るのは、あなたに便宜を図ることくらいよ」

「わかった。がんばるよ。教皇陛下」

よいしょ、とファルディアは革製のスツーカーズを持ち上げる。

「はいじゃあ、お邪魔した。私は暫く研究室しほらに引きこもるよ」

「ええ。頑張つてね」

ファルディアは、そう言うと、鍵を開けて出て行つた。

一人執務室に残された、ファイム。

「……………私は、好きな子一人守れない女の子で……………でも、組織の長。権力の頂点にいる。だけど……………！」
涙が溢れる。

どうして、あの時彼女を止められなかったのかと。

自分が、もう少しだけ強ければ。力があれば。ティアリイを守れたというのに。

ファルディアは、その力すら危ういという。

やはり、自分は無力なのだろうか。

そんなことはない。魔術が使える限り、私は力を持っている。

ひとの嘘を暴く力。その代償として、ひとを従わせる力。

それが、彼女が神を視た証。新たな力。彼女はその視線を通じ、神世の力を振るう。

それは、既存の魔術に定義されていない領域の力。

あのとき、私がこのちからを持つていたら、彼女に死ぬなと命じただろうか。

それとも、相思相愛を誓うだろうか。

「……………わたしは」

唇を噛む。

「世界を騙し、世界を黒で塗りつぶす……………！」

じじじ、と机の上のランタンが音を立てる。

ファイムは、その中で燃える、炎を見つめる。

「その覚悟をする助けを……………私に頂戴……………ティア……………！」

3

「教主様」

ん、とその声に小さく応じた声の主は、不思議で静謐な少女だった。

アメジストとオパールを片眼ずつ嵌め込んだような瞳。一度も目の光を浴びたことの無いような白い肌。白絹の様な美しいプラチナブロンドの髪。そして年齢に不相応な小さい背丈。

人形のようなその容姿は、北の宗教国家、イズミエル教国の元首にして魔術師協会と大陸の覇権を二分する一大勢力、イズミエルユウ||クルシアを主神とする教会の教主である、エリシイル||フェイア||セリスティスその人に他ならない。

「クラスノゴールスク機巧法人企業より、言伝を預かっております」

それに、エリシイルは意に介さないように答えた。

「俗世の戯れ言など捨ておくがいい」

「いいえ、それが……………」

報告者は、すこし躊躇してから、言う。

「火急の用件とのございます」

「ほう。火急の用、とな」

その言葉に、ほんの少し、エリシイルの表情が動く。

「申してみよ」

「いいえ。直接教主様にお渡しせよ、と……………」

「相も変わらず無粋な者達じゃ。どれ、渡せ」

「は……………」

そう言うのと、報告者は恭しくその書簡をエリシイルに手渡した。

寶石を嵌め込んだようなエリシイルの瞳が、文字を追ひ、暫くして、エリシイルはため息ともつかないような声で独りごちた。

「あやつ等、気づきおつたのか——。のう、一つ、主に問おうではないか」

「……何に、ございますか？」

訝しげに、男は応じた。

「——魔術、とは、何じゃ」

「クルシア様が、我々に与えた力でございます。生きるための術であり、糧であると、私は教えられました」

その答えを、僅かに口端を歪めながら、エリシイルは一笑に付した。

「そうか。そうよのう。それは正しい答えぞ。だが、本質を理解しておらぬの」

「……………」

「まあよい。クラスノゴールスクには承知したと伝えよ」

「は——」

一礼して去ろうとする男。それをエリシイルは見送ろうとしなかつた。

「クラスナーエ位に属する者と、ファレータヴィ位の者を山岳に送れ。人選はシルエン大神官に任せよ」

「は——？ 南方へ、ございますか？」

その問いに、エリシイルは無表情で答えた。

「否——。ラウプホルツへ送れ。良いな。気取られるでないぞ」

その答えに、男の顔が凍り付く。

「ラウプホルツへ、ございますか?! 畏れながら、それは——」

ラウプホルツは、イズミイエル教団と魔術師協会、即ち教会と協会の領土的、文化的な緩衝地帯に当たる。ラウプホルツに戦力を送るといふ

ことは、平衡している戦力を崩すことになる。

「構わぬ。良いな。我の旨、正確に伝えよ。そうじゃな——將には南に反感を持つ者が良い。強い憎しみを持つ者が、のう」

有無など言えるはずがない。男の前にいるのは神の化身にして、教会の長、エリシイルⅡフェイアⅢセリスティスその人に他ならないのだから。

「つ……………」

躊躇する男。

それを、エリシイルの虚ろな硝子のような瞳がのぞく。

「何じゃ。主は私の言うことが聞けぬと申すかや」

感情のこもらない筈の声に、剃刀のような殺意が混じつたような気がした。

その刃に、男が怯えたかどうかは分からない。けれど、男は声を詰まらせ、口から言葉にならない空気を吐き出したあとに、言った。

「……………畏まりました」

そう、男が答えるのを、満足そうに見届けると、エリシイルは頷いた。

「下がって良いぞ」

「は——」

顔面蒼白になりながら、男がその場をあとにする。

男の姿が消えたのを見て、エリシイルは呟いた。

「ふむ。気づきおつたか。存外にヒトというものも頭が回るようじゃ。

だが、あやつ等が事に気づいたときはすでに手遅れよ。

……………つく……………ッ！」

その様子を、影で見ながら震えていた者がいた。

イルン——イルンツイクインディーナ。

そのか細く幼い肢体を自ら掻き抱きながら、必死に沸き起こる震駭を抑えながら、イルンは恐怖と戦う。

あれは、自分の知っている教主ではないと。表向きは、祭祀を司る神官としての姿。静謐で、厳かで、そして清廉とした様子は、何ら変わりがない。けれど、自分に向けるその表情は、全く異なったものに変化を遂げている。

いつからだろうか、エリシイルが、『姉様』が、自分の頭を優しく撫でてくれなくなったのは。

くつくつと嗤うエリシイルの後ろ姿を見ながら、イルンは、恐ろしい想像に駆られた。

なにかが、何か得体の知れないモノが、エリシイルに成り代わってしまったのではないかと。

そうであれば、イルンしか気づき得ない豹変も納得がいく。本当のエリシイルはどこかで生きていて、今、執務を取り仕切っているエリシイルは別人なのだ、と思えば、得心がいけないこともない。

しかし、今、エリシイルが、『姉様』が、行おうとしている企みの切端を知ったとして何としよう。シルエン大神官に相談する？ 対峙すべき敵である魔術師協会に密告する？ 誰にも話してはいけない内容の話だというのは分かっている。けれど、それは自分の中でとどめておくには余りにも重大すぎる。

「誰ぞ？ そこにおるのは」

びっくり、と身体が硬直する。

その、以前とは似てもつかない冷たい声。普段のエリシイルの声。

「ごわいよ………姉様………っ！」

仮面のように硬直した、無表情のエリシイルの気配。

それが、足音と共に、着実に近寄ってくる。けれど、身体は自分の思うように動いてはくれない。イルンの足は、そこに根が生えてしまったかのように、動かない。

「——ほう」

声。

おそろおそろ顔を上げる。

「主がイルン、か——？」

その他人事のような問いに、イルンの身体は総毛立つ。

なぜ、どうして。

聞きたい。

聞きたいけれど、聞けない。

咽頭は震え、気管と声門は、ただの空気の通り道になる。ひゅうひゅうと、喉笛が鳴るだけの無意味な管になり、舌はその機能を果たさない。顎は震え、歯の根は合わず、故に言葉を発することすらままならない。

何故なら、エリシイルの気配は、イルンの知るものとは明らかに違っているから——

「失礼いたしました……！ この件、他言無用に致しますので……ど
うか……御慈悲を………！」

その言葉に、エリシイルの顔が僅かに歪む。

「——まあ良い。主——」

その言葉が、イルンの耳に届くか否か。

その時に、イルンの視界からエリシイルは消えていた。

「く——は——」

同時に、視界が暗転する。

その華奢な身体に、陶製の人形のような、触れれば壊れてしまいそうな硝子細工のような身体に、そんな力があつたのかは分からない。けれど、消えたエリシイルの身体は、イルンの間合いに飛び込み、その鳩尾に確実に掌底をめり込ませていた。

エリシイルを映す視界は反転していく。

そうして意識の緞帳が下り、イルンの記憶はそこで途絶えた。

5

ここは、どこだろう。

長い間、気を失っていたような気がする。

まず、気がついたのは、鼻を突く微の匂い。

ぼんやりしている視界が徐々ににつきりしてくると、ここが漆喰で囲まれた部屋だと知る。湿っぽい、じめじめした感じがする。

土と埃の匂いがある部屋。

先ほどまで居た、大聖堂とは打って変わった風景——

「っ！」

そうだ。と思い至る。

自分の最後の記憶。「姉様」に昏倒させられた記憶。

「ほう。気づいたか」

——その、主の声。背に氷柱を抱かされたような感覚が突き抜ける。

「まあ良い。主は、シニイ位、第十四序列のイルンⅡツイクⅡインディーナよの？」

「……………っ！」

水のように冷たい声に全身が総毛立つ。説法や拝礼とは違う、エリシイルの纏う空気に怖気を覚えて、口をつぐんだ。

「なあに、隠さずとも良い。主の位階や序列など我にとつては些末なこと。我が興味があるのは、主が見聞きしたことぞ」

「……………そんな……………。教主様の御神託を盗み聞きするなど、以ての外にございます。私は……………」

「見たのだな」

遮るように、エリシイルが言った。

「……………いいえ……………そのような……………！」

「白を切り通しても無駄じゃ。主らヒトの気配など、知るのは容易いこと。主がああ場に居たことなど、知っておる」

「……………」

押し黙るイルン。下手に口を利けば何をされるか分からない、という恐怖が身体を縛っている。

「のう。主も知ったからには、相応の責を負うのが当然よのう」

言うど、エリシイルは、拳を作ると、壁の鏡にそれをたたき込んだ。

——っしやあん！

エリシイルの白磁のような手に傷が付き、そこを紅い血が彩る。

「主は何を知った？ 正直に申せ」

「……………っ！」

その血に舌を這わせ、妖艶な笑みを浮かべて、エリシイルは言う。

「……そうかや」

そう言うと、エリシイルは、床に膝をつき、割れた鏡の欠片を拾い上げる。

鋭利に尖ったそれは、燭台の蝟燭の光を反射して、橙色に光り輝いている。

「のう。イルン。主は、それを覚えておるのかや」

ざり、と、エリシイルは歩みを進める。

「その眼と耳で企みを知り、その口で、人に伝え広める」

一歩。

「それを我が許すと思うのかや？」

また、一歩。

「ひ……っ！ お許してください……ッ!! どうか……どうか……御慈悲を……ッ！」

何をされるか分からない恐怖。イルンは、反射的に教主に対して許しを乞うていた。

「慈悲、と申すか。イルン。ではな、命だけは生かしておいてやろう。この器に対するせめてもの饒として、な——」

「——っ！」

それを聞き、イルンの顔が、蒼白に染まる。

「そんな……姉様……は……?」

「姉様? ほう、主とそう言う関係なのか、あやつは。女色であったか、

この器は」

「……うっ……わ……?」

何を言っているのか分からない。

脳が、全力で理解を拒絶している。

「教えて欲しいか? くくく。」

この女はな、我らの依代であったのよ。人間など、所詮盤上のコマにすぎぬ。黒と白。南と北の争いに、この女は何かと都合が良くての……」

「……! 魔術師と……せんそうを……するの……?!」

「前の戦で、我々は学んだ。人は予想以上に脆く、壊れやすいものだ」と

前の戦——

それは大陸中央部の諸都市、諸国家が荒廃した戦争。イルンの祖父母の代が経験した戦争だ。

それを、どうして、この教主が知っている? 齢十八に過ぎない少女が、どうして半世紀前のそれを知っている?

「しかし、人心を操るのは容易であると。知った」

かつ、かつ。と石畳の上を歩きながら、教主は言う。

「南も、北も。前の戦で疲弊した。東と西を失う結果になったとはいえ、我々が南ともう一戦交えるだけの力は残っておらぬ。だが、南の力を削ぐことはできる。斃すこと叶わずとも、疲弊させることはできる」

エリシイルは、腰を折り、地面に落ちたきらきら光る欠片を拾う。

「主にも、その駒になってもらおうぞ——!」

「——ッ！」

逃げようとする。

けれど、それは、手足に施された鉄鎖の拘束によって叶わない。

エリシイルの白磁の手が近づいてくる。

首を振って逃げようとする。けれど、エリシイルは、それを片手で難

なく御してしまふ。

「や——」

ぶじゆ。

それは、ほんの小指の先ほどの臓器であるにもかかわらず、その音はやけに大きく、耳じだに突く。

「ああああああああああアアアアア——ッ!!」

眼に火箸を押しつけられたような痛みが走る。脊髄が焼け付くような痛みが駆け抜ける。涙が滝のように溢れ出し、異物を取り除こうと精いっぱい足搔あがき続ける。

けれど、それは敵うことなく、硝子の欠片を取り除こうとめまぐるしく動く眼球が、その突き刺さった欠片と眼窩の骨とこすれてじやりじやりと音を立てる。その度にイルンの左眼は様々な色の光を脳に焼き付け、絶叫を上げさせ、網膜を搔き回していく。

「どうじゃ？　かつて異教の巫女は、幽世かくりよを覗のぞかんとしてその目を潰つぶしたと言う——のう、イルン、今の主には、何が覚えておるのじゃ？」

「つアアああアああああああアアア——ッ!!」

絶叫。

耳をつんざかんばかりの絶叫。

経験したことの無い痛み、視覚を奪われる恐怖、そして異物が骨を擦こすり上げる不快感。

滝のように流れる涙。もう血なのか、涙なのか、眼球の中身なのか、よく分からない。

とにかく赤黒い液体を左眼から流しながら、イルンは壊れた蓄音機のような絶叫を上げ続ける。

「ほうれ——」

また。

エリシイルの指が碎片さいへんをつまみ上げ、それをイルンの眼へと差し込んでいく。

「つく……ああアアああ……や……ああ……ッ!」

二回目は、それほど痛みを感じなかった。

いいや、それは見えていなかったからだろうか。

それとも、痛みが慣れてしまったのだろうか。

わからない。わかりたくもない。わかる余裕もない。わかるはずがない。

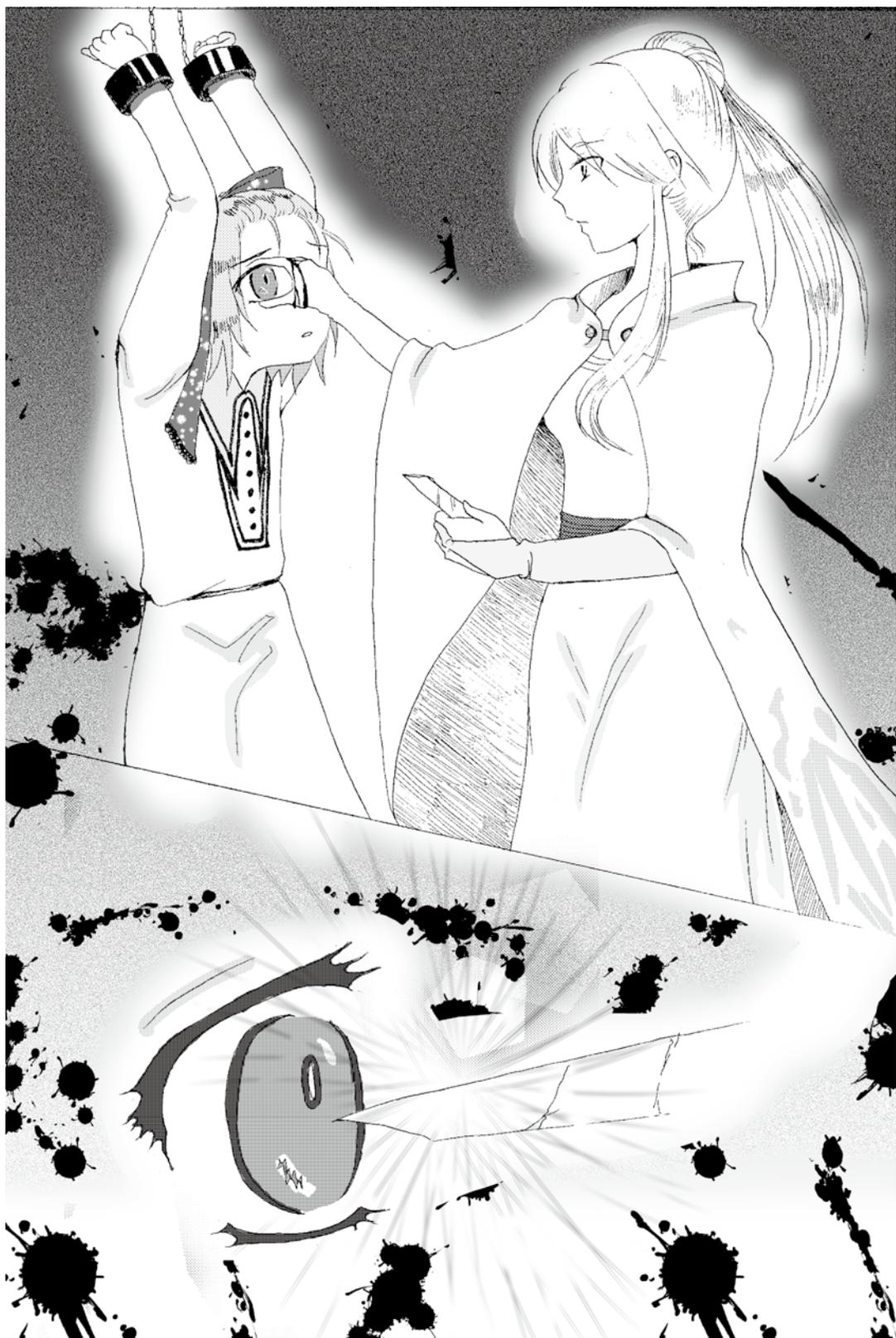
じやり、じやり、と硝子体しょうしたいの中で、鏡の破片がこすれて嫌な音を立てる。頭蓋を振るわせ、直接中耳に届くその不快な音色は、鼓膜を経るこ

となく、直接脳髄へ響く。

「のう、教えてくれんか。イルン。——主には、いま、何が覚えて

おるのだ？」

必死に首を振る。頬に何かが伝う。言葉を発することはできない。けれど、本能が、首を振れと命令している。それに抗あがう術はない。否、抗



う理性など存在しない。

「そうか、それだけでは足りんと申すか」

また。

エリシイルの指が床に伸びる。

首を振る。けれど、その願いは叶わない。もはや涙でぼやけきつた世界で、薄ぼんやりとエリシイルの影が動いているだけに過ぎない。

けれど、イルンの視覚は、その像を捕らえて放さない。脳は必要以上にそのぼやけた像を強調し、ひたすらゆつくりと、そして確実に、エリシイルの行動を追っていく。

「あああああああああああああッ!!」

また、ぶちゅ、という粘液質の音が脳髓に響く。

それはきつと、誰にも聞こえていないだろう。

他ならない、イルンを除いて。

「鏡も、幽世を映すという。のう、イルン。幽世を視るために、幽世を覗く鏡で眼を潰した気分はどうじゃ? 何が見えるかの?」

聞こえている。けれど理解は叶わない。

本能が理解を拒絶している。

ケモノのように暴れようと、気が触れたように泣き叫ぼうとも、それらは全て無に帰す。

ここはどこだか分からないところ。けれど、少なくとも、誰も来ない場所。

もしくは、こういうことが行われていても誰も不思議に思わないところ

「そうじゃ、両目を潰せば、見えるやもしれんぞ」

「——っ!」

イルンの全身が凍り付く。

痛みを一瞬忘れて強はらせたその身体を、エリシイルがニタリと嘔つて見据えていた。

「——ッ!!」

やああアああアああアああアああアああア——!!!

涙と血液、それとよく分からない液体でぐしゃぐしゃになった顔を振り、イルンは全力で拒否する。

けれど、エリシイルの指は、イルンの眼瞼を捕らえて放さない。

「ほれ——」

尖った硝子の破片が、近づいてくる。

それは、近くなりすぎてさらに暈けていき。

その視界に黒い亀裂を生じさせる。

「ああアああアああアああアああア——!!!」

ぶちゅ

と音を立てて、硝子の破片が、イルンのもう片方の眼球に収まった。

獣のような絶叫。咆哮と言ってもいいかもしれない、その悲鳴は、イルンがいまだ正気を保っていることの証左にほかならない。いや、まだ『生きながらえている』と言つてもいいかもしれない。

万華鏡のように映る世界。

紅い、赫い、怖い、分裂して揺らぐ世界。

「狂うことは許さぬえ？ 主がそれを望んだとしても——じゃ」

そこで、エリシイルは、何か面白いことを思いついたかのように、手を打つと、うわごとを垂れ流し続けているイルンの耳元に口寄せた。

「のう、主には、ひとつ、働いて貰うとしようぞ——」

それが、イルンの脳髓に届き、理解に至ったかはわからない、けれど、イルンはがくがくと、首を縦に振った。

「ああああああああああああああ——！！」

わけのわからない声を、ただひたすらに上げながら——

.....

.....

.....

< 奥付 >

発行日；2009年8月16日
発行；Cutting Edge. & netstat LAB.
著者；冷泉
キャラクターデザイン；ひとや
連絡先；reizei.netstat@gmail.com
<http://netstat.jp/>
<http://reizei.sakura.ne.jp/CE/>

印刷・製本；株式会社 ポプルス様

— 君を忘れた世界で —

永遠戦争

-II-

.....

本作品はフィクションであり、実在の人物・団体・事件とは一切関係有りません。

本書を公衆に送信できる状態に置くことを厳に禁じます。

用法と要領を守って、楽しい百合ライフをお過ごしください。

お願いしましたよ。(n°ω°`)

本版は、コミックマーケット 76 において頒布する「永遠戦争 -II-」の一部分を抜粋したものです。

Cutting Edge, にて無料頒布を行っておりますが、著作権は放棄しておりません。

また、二次転載、改編・翻訳、それに類する行為も認めておりません。

